特116
705

寝覚
江乃嶋
代主
丸世戸
逆勇

外

一

始

特116
705

寢覺　概説

外一巻ノ一

延喜の聖主より勅を受けて一臣下木曽寢覺の床に住めりといふ三返りの翁を見んとて信濃路に赴き木曽の寢覚に至れば老翁に逢ふ。勅使の旨を語れば翁懇ろにめでたき仙藥を服して三度若やぐによつて此名ありと、三返の翁の事ども語り「我こそ三返の翁よ仙藥をも君に捧げ、夕月の夜もすがら舞樂をなして慰め申さん」と云ふかと思へば失せにけり。夜深く月冴かなる頃翁は再び來現し様々の樂を奏すれば、龍王は川波を翻して顯はれ仙藥を勅使に捧ぐると見えて東雲の空白々と明けりとなり。

此ノ曲ハ総シテ清ラカニサラリト謡フベシ

役別		装束附
前シテ	老翁	面小牛尉、阿古父尉ニモ（紐襷）尉髪 着附小格子 茶絓水衣 腰帯 襟浅黄、襷ニテモ 扇指シ 紫 杖 翁付ノトキハ白大口
ツレ	男	直面 着附無地熨斗目 浅黄ハ縷水衣 腰帯 襟赤 扇 紫 翁付ノトキハ白大口
後シテ	三返り翁	面皺瘤尉又ハ茗荷悪尉ニモ（紐襷）白垂 輪蔵帽子 白鉢巻 着附厚板 白地又ハ茶地狩衣 半切（襟色木賊色ノ類）紋附腰帯 襟浅黄 神扇
後ツレ二人	天女（謡ナシ）	面連面（紐黒）天冠黒垂 鉢巻 着附摺箔 紫長絹 緋大口 襟赤 扇持
後ツレ二人	竜神（謡ナシ）	面黒髭（紐黒）鉢巻 赤頭（竜戴之）着附段厚板 紺法被 赤地半切 紋附腰帯 襟 襟色 打杖 一人ハ菜袋
ワキ	勅使	大臣烏帽子（赤上頭巾）着附厚板 紺袷狩衣 白大口 紋附腰帯 扇
ワキツレ二人	従者	大臣烏帽子（萌黄上頭巾）着附厚板 赤袷狩衣 白大口 紋附腰帯 扇

季	三月	曲柄	脇能（初番目）（神祇物）
所	信濃国西筑摩郡 駒根村寝覚之床	稽古順	

寝覚

作者不明

ワキ勅使 ワキツレ二人従者 真ノ次第上ニ ツヨク 拍子ニ合

畏き君の勅を受け。畏き君の勅を受け。東の旅に急がん

ワキ詞 サラリト確カリ そもそもこれは延喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。さても信濃の国木曽の郡に。寝覚の床とて在所あり。彼の所に三帰の翁と申す老寿

帝国図書館蔵
大正 9.1.27 内交

命めでたき薬を与ふる由君聞
しめし及ばせ給ひ。急ぎ召れて参れ
との宣旨を蒙り只今信濃の国
寝覚の里へと急ぎ候

道行 三人 上 思ひたつ。
空も重なる雲の袖。空も重なる
雲の袖靡きて帰る雁も。山又山
を越え過ぎて。行けば程なき狭衣

木曽の御坂も近づくや。嵐に更くる
夜半の空。寝覚の床かこれかとよ
寝覚の床かこれかとよ

急ぎ候間。
これは早寝覚の床に着きて候。この
木下にて彼の翁を尋ねうずるにて候

シテ老翁 ツレ男二人 真ノ一声 拍子ニ合ハズ
信濃路や。木曽の御坂の東風にも
行方も知らぬ花ぞ散る 霞こめ

たる谷の戸に出る鶯の聲しげし
シテサシ上 霧から来立つ山路分け過ぎて見る
や嶺の尾上の鐘。おぼろおぼろと
聞き馴れてたどるや老の坂なるらん
上哥 立ちのぼる木曾の麻衣袖しをり
木曾の麻衣袖しをり。賤が家居の
業なれば。かけ路の橋もなれなれて。
○小謡

幾重かさなる白雪の。解けて落ち
くる谷川の水も岩根や傳ふらん
水も岩根や傳ふらん。
ワキカヽツテ いかにこれ
なる老翁に尋ぬべき事の候 シテ 此方の
事にて候か何事にて候ぞ。見申せばこの
あたりにては見馴れ申さぬ御姿なり。もし
都より御下向にては候か。げによく見て

あるものかなこれは延喜の聖主に
仕へ奉る臣下なるが此頃三帰の
翁と申す者。寿命めでたき薬を與
ふる由君聞しめし及ばせ給ひ。急ぎ
見て参れとの宣旨なり彼の老翁が
私宅を教へ候へ　シテ気ヲカヘ　さては勅使にて御座候
ぞや。あら有難やな。総じて此三帰

の翁と申す。生所もあらず出所もなく
ツレカヽル上　拍子三合ハズ　ただおのづからその使にて。寝覚の枕
松が根を　シテ　宿りと定むる翁なれば定
めてをは奉るべし　シテ　げにげにこれは
見えたりと岩根の枕寝覚の床に
シテ　暫く御待ち候へさらば　暫し休らひ
○小謡　シテ　そのうちに　拍子三合　○日も夕暮に程もなく

日も夕暮て程もなく、なるや弥生の空なれば、月も朧にさし出て、山の端白き松の風。枝もならさぬ木の下に。暫しやすらふ猿居かな暫しやすらふ猿居かな。

なほなほ寝覚の床のいはれ委しく御物語り候へ。

そもそもこの寝覚の床と申すハ役の行者

○サシ曲弱吟

志づかに法座となして觀念の眠を醒まし給ふ。彼の三歸の老翁ハ生所も知らず出所もなく只おのづから忽然と現れ出て寝覚の床にて千歳を送るそのうちに壽命めでたき薬を服し三度若やぐ故より三歸の翁と名づけたり

クセ下 柏子二合
或時翁申すやう。羿養射術を傳へてその名を雲の上にあげざれば愛染明王は定の弓慧の矢にて悪魔を従へ給ふなり。われは又御薬の威徳をもつて大君の代を治めんと思ふぞと。勅使にて申し上げければ勅使も喜悦の色をなしいかにして宣へだ

シテ上
今は何をかつゝむべき。われこの前に年経たる。三帰の翁なるが目前に来りたり。勅使暫く待ち給へ。夕月の夜もすがら。舞楽を奏し見せ申し。又御薬を與へんと。云ふかと見れば老翁の。岩陰に寄ると見えて行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり

中入来序問

（ツレ天女出）上 天つ風天つ風。雲の通ひ路吹きとぢよ。
乙女の衣いろいろに。糸竹も音を添へて。
波の鼓声澄むや。海青楽を奏しけり （天女舞）

後シテ 上 そもそもこれは。醫王佛の化現。無病
息災の方便のため。三歸の翁に
現れ出でたるなり 地 その時老翁と
ほそをと開き。その時老翁ほそをと開

き。青天遥かにて見渡しければ。南
て雲晴れ。西北の風も吹きとゞまつ
て。花降り異香音楽の。響き舞楽の
数々。乙女の袂。返す返すも面白や
上 夜遊の舞楽も時過ぎて。夜遊の
舞楽も時過ぎて。有明方の。月も
落ちくる折柄に。不思議や川波の

げしく荒れて。二龍の姿へ。現れたり

（龍神大出）

上 兩龍王は川波に浮び。兩龍王は川波に浮び。彼の御薬を。捧ぐる氣色。汀は窪てぞ見えたりける

シテ上 老翁悦びの思ひをなして。老翁悦びの思ひをなして。彼の客人の。御慰に。神通自在の。祕術を現して。夜遊のたはむれ。なしたまふ

シテ中 かくて時移り頃去れば。かくて時移り頃去れば。彼の御薬を。君に捧げ。勅使に與へてこれまでなりと。木曽の棧道ゆらりと打ち渡り。歸り給へば。龍神も。東西に飛び翔り。波にたはむれ巖よあがれば。おもしらしらぞ。明け方の空で。夜もしらしらと。明

けふの空に夢の寝覚は醒めにけり

江野島　概説

外一巻ノ二

欽明天皇の十三年卯月に相撲江の浦に奇端あり、一塊の島海上に現はれ出でその上に辨財天女影向あり、有難きしるしなれば急ぎ見て参れとの勅を蒙り、勅使即ち東海道を下り江の島に來て見れば漁翁漁夫に逢ふ、いろいろ問答の末漁翁は江の島の出現したる謂れなど委しく語り我を誰とは愚かなる仰せや今此島を守りの神五頭龍王よとて消え失せけるが、暫くして辨財天二童子に守護され天降り給ひ樂を奏して勅使を慰め五頭龍王も本體を顯して國の泰平を祝しけりとなり。

此曲凡テ朗ラカニサラリト謡フベシ

役別		装束附
前シテ	漁翁	面朝倉尉笑尉ニモ（紐棒） 尉髪 着附小格子厚板 茶莚水衣 襟浅黄 尉扇 緞子腰帯 釣竿
前ツレ	男 漁夫	直面 着附無地熨斗目 浅黄薄水衣 縫紋腰帯 襟赤 黒繪扇 釣竿
後シテ	五頭竜王	面大飛出（紐赤） 赤頭（竜戴ニ） 赤地鉢巻 着附段厚板 狩衣 半切 縫紋腰帯 襟紺 新狀 又ハ大竜ヲ戴クコトモアリ 又ハ打杖持タズニ扇持コトモアリ
後ツレ（天女）	辯財天女	面連面（紐黒） 鬘 鬘帯 黒垂 天冠 着附摺箔 緋大口（又ハ白モ） 舞衣又ハ長絹ニモ 襟赤 縫紋腰帯 天女扇 火焔玉盤ニ戴セ
子方二人	童子（謡ナシ）	黒頭 白鉢巻 着附縫箔 水衣 縫入腰帯 襟赤 童子扇
ワキ	勅使	大臣烏帽子（赤上頭掛） 着附厚板 紺袷狩衣 白大口 腰帯 扇
ワキツレ二人	従者	大臣烏帽子（萠黄上頭掛） 着附厚板 紺袷厚板 白大口 腰帯 扇

季	不定	曲柄	脇能（切畄目）（神、祝物）
所	相模国鎌倉郡江ノ島	稽古順	

江野島

彌次郎長俊作

ワキ勅使 ワキツレ二人従者 真ノ次第 上 ツヨク 拍子ニ合 朗カニサラリ

治まるとりと江の島や。治まるとりと江の島や。動かぬ国ぞ久しき

ワキ詞 朗カニ 抑もこれは欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。さても相模の國江野とは、浦に去んぬる卯月十日あまりに。不思議の奇瑞様々あつて。海上に

一つの嶋涌出す。則ち江野に名ぞらへてこれも江の嶋と號す。嶋の雲上に天女現れ給ふ。これ辨才天影向の地にて。福寿圓満の霊地なれば。急ぎ参りて拝まんとの。勅に任せ。只今東海道に下向仕り候

道行三人上 東路も。そなたの空に行く雲の。

そなたの空に行く雲の。影も涼しき嶋の海。遥けき旅を駿河なる富士の高嶺の月影も。幾山々にうつりきし。相模の國にも着きにけり相模の國に着きにけり 日も重ねて急ぎ候程に。これははや相模の國江の嶋に着きて候。この浦の者を相

シテ漁翁 ツレ男 真ノ一声 拍子ニ合ハズ

待ち事の由とも窺はざらやと存じ候
嶋つ鳥浮き海松深し波の上。有
明残る。あさぼらけ波もて立つ
や哀衣うらぶれ渡る。沖つ風

シテサシ上

それ江の嶋は崑崙の奇を寫し。五
城の垣重なれども蓬莱海の
勢ひを傳へたる。三壺の形あらたなり。

秦皇徐市を遣はし。驪山塚の春
の風。あまさりかてらに渡らめや。
漢帝齊少を用ゐては。霸陵原の
秋の月。心凄くは澄まざらまし。
真に人間の妙奇仙境の秘跡なり

下哥中 拍子ニ合

一たびも歩を運ぶともからは

○小謡

上哥

三千界の内にはまづ。三千界の内に

まづ無量福の寶を得。一劫生の後
にて早く不退轉の位に至る。かゝる誓ひ
の海山も。なほ萬代の末かけて。
靡き從ひてこの國の。盡きせぬ御代の。
ありがたや盡きせぬ御代はありが
たや。われ江の嶋にあがり。山海の
致景を眺め。事の由を窺ふ所に。

海人あまた來れり。かれに尋ね。おこと
はこの浦の者か　シテ　さん候この浦の
者にては候が。毎日この嶋にあがり。山上
山下岩窟社々を清め申す者にて
候。さて御身はいづくよりの御參詣
にて候ぞ　ワキ　これは欽明天皇に仕へ
奉る臣下なるが。この嶋涌出の由

聞しめされ事の子細を悉く尋ね
見てまゐれとの宣旨に任せ。是まで
勅使を下さるゝなり。委しく子細を
申し候へ　シテウケテ閑カニ　さては忝くも帝より
の勅使にてましますぞや。そもそ
もこの嶋は。欽明天皇十三年。卯月
十二日戌の刻より。同じく廿三日辰の

刻に至るまで。江野南海湖水湊
の口に雲霞暗く蔽ひて。天水紛
紜たり。大地震動する事十日に
あまれり。そばかりありて天女雲上
に現れ。童子左右に侍り。諸々の天
衆龍神水火雷電。山神鬼魅夜叉
羅刹。雲上より磐石を下し。海底

より塊砂を噴き出だす　ツレ 磈々たる
雷の光せいくを万天の間に飛ばし
シテ 霹靂帛を裂くが如し波浪金を
沸すに似たり　ツレ 岩巌多く浮み出
だし夜叉鬼神鳴を作る　シテ 或は銅杵
を以つて打ち砕き　ツレ 或は鉄杖を
以つて裂き破る　シテ 又は二つの岩を
押し合せ　ツレ 又は二つの石を峙てたり
シテ とりどりに鳴を造り給へば梵天
帝釈四大天王上界の天人下界の龍
神　ツレ 残らずここに現れ給ひおのおの
これを衛護し給ふその後雷雲収ま
りて海上に一つの嶋を成せりすな
はち江野になぞらへて江の嶋と

これぞと申すなり、謂を聞けば有りがたや則ちこれは明君の徳なる御代のしるしを見せてかゝる奇特を拝む事よといよいよ御影を仰ぐなりさてこの嶋は天部の影向又はいかなる御神の鎮守と現れ給ふらんなかなかの事この嶋におのおの

諸神まします中にも龍の口の明神は天部と夫婦の御神にて衆生済度の方便あがめても猶餘りあり、げに有難やかくばかり深き恵の海山もなほ萬歳を呼ばふなる聲が松吹く風の音の涼しき巌に寄る波も治まる國の

志るしを見せて、ワキ 豊に住める、

○小謡

シテ この時を、萬代の始とけみを祈り

おきし。始とけみを祈りおきて今行

く末もこの嶋の、誓ひは盡きぬ無

量億の楽みの数々を受けつぐ

國ぞ久しき。善神一切の福を授け。

悪邪の萬里の禍を拂ふ浦風も。

上 天部の誓ひあることかや。頼めなを隔て

なき神心の玉も曇らじ。ワキ 猶々

江の嶋において目出度き子細さま

ざまあるべし。詳さに申し候へ

クリ地上 拍子不合 手掛 そもそも江の嶋といつぱその廻れ

る事三十餘町その高き事数十餘

サシ曲獨吟

丈なり。シテサシ上 水は山の陰を含み。山は水

の心に任せたり。塊中の砌清浅たり。白雲のやぶる所にて洞門開けて翠屏あらはれたり。巌窟の奥遥かに入つて。渺々たる巌の狭間より落ちくる水は西天の無熱池の池水なるとかや。稀宝無漏の仙人は此池をしめて掬し。弥陀有縁の教主は此の嶋に来つて衆生を導く二世安楽の。この嶋にて。誰かあゆみをかけざるべき

クセ 下　拍子二合

それ此嶋は武蔵相模の境にて。鎌倉海月の向に深沢といふ湖あり。彼の湖に大蛇住めり。その身一つにして。その頭五つあり。隆準の鼻胡髯の腮眼は日月とつらぬき身に黒雲をまつ

へり。然れバ神武天皇より。垂仁天皇
の御宇まで。十一代の帝祚を經。七百
餘歳の年祀を經て國中に滿ちて
人を取る。景行天皇の御宇に至り。
龍悪いよ／＼盛んなれバ。人皆石窟に
隱れ住み涕哭の聲限りなし。時に
天部は龍に向ひ。汝が悪心を翻し

殺害をとゞめて此國の守護神とな
らバ夫婦のかたらひをわれなすべし。
堅く誓約し給へバ龍王もこれに感じ
それより殺害をとゞめて善心を思
ひ龍の口の明神となり給ひ。國土を
守護し給ふなり。はや時移る夕
雲のはや時移る夕雲の。かゝる神秘

も大方の浦人いかで末錦四手の。神の告かや有難やなかなかなれや大君のみことかしこみ動て今ぞ感ずる志るしを現さん夜すがらこゝに待ち給へ動に感ぜん志るしとはそも老人は誰やらん

シテ 汝しはさても愚なり。われは五頭龍

地 今は又天部の夫婦の

神となりし龍の口の明神とは。老人を見るべし今宵の月に天部の御姿わが姿をも。現ずべしと夕波にたちまぎれつゝ失せ給ひてそあらたなれ失せ給ひてそあらたなれ

中入来序間

ワキカヽル上 波伯が絶技をさきにあげ。張儀が英聲を後に馳す。これ聰明勇進

辯才天の無量無邊不可思議の
功徳を授け現しおはします
月も照り添ふ如意の寶珠の光を
仰か仰がるおほ。仰げおほ。
心の如しと聞く時は今この君の
それ御影にあひてあふ下和が
玉もあてあらず。彼の如意寶珠を。

君に捧げんと光もかゞやく御殿の扉
左右に開けて十五童子。天部の御姿
現れたり衆生濟度のその御方便。
衆生濟度のその御方便も。まづ福壽圓
滿の影ひをかなへ。現壽安穏後生清
淨土曇らぬ寶珠を君に捧げんと
勅使にこれを。授け給ひ。舞樂を奏し。

拍子を揃へ羽袖をかへして舞ひ給ふ

天人聖衆菩薩の舞も天人聖衆菩薩の舞もかくやと思ひ白波の立ち来る沖に雲くらがつて疾風吹きたて逆巻く潮の五頭龍王の出現かや

われ昔の深澤の池に住んで五頭龍王と現れ今の国土の守護神である。

龍の口の明神なり聞きしに変らぬ因位の形聞きしに変らぬ因位の形

頭の五頭龍胡髯の鬼眼に白日をつらぬきその身に黒雲をまとへり。

苔むす松も靡き伏す巌の峨々たる上にて現れたる神仏水波の隔てあり神仏水波の隔てあれど同一體の。

○独吟
○仕舞

利益もさまざまの辨才天女は威光
を現し明神諸共に百千劫の齢を
守らんと約諾堅き誓言を傳ひ涼さ
るてふ緑の海に飛びし給へば磯
打つ波も龍の口の明神忽ち威を
揮ひ雲を吹き嵐にかゝやく眼の光の
天地に充ち満てりその時天女の

童子を伴ひ紫雲の上に現れ給へ
ば明神立ちくる黒雲に乗じ光を放
つて嶋根を包めり。廻り廻るや暫し
が程は。とりどりとりどり姿を雲中に現
しとりどりとりどり姿を雲中に現すも
げに有難き。影向かな。

代主　概説　外一巻ノ三

関の戸さゝず治まれる御代、加茂の神職同明神と一體なる大和葛城の明神に参らんとて葛城山に至りしに社中を清むる老人、男出で來り、御代の安らけく神徳の限りなきを喜び合ふ、神職と加茂の本社の事ども問答あり、又詞にて述べ難き神慮の程など語りて我は事代主の神なりと雲に翔り天の戸に入らせ給ふ、夜更けて心と共に澄む月の風静なる折柄、神は再び顕はれ給ひ様々の舞を奏で、御代の太平萬歳を祝ひて、めでたき數々舞ひ謡ひ、神慮の程を示しけりとぞ。

此ノ曲ハサラリト謡フ中ニハ重ンモリシタル處モアルベシ

小書　知波夜傳

役別		装束附
前シテ	尉	面小牛尉（紐樺）　尉髪　着附小格子厚板　茶絓水衣　白大口　緞子腰帯　襟浅黄、樺ノ類　尉扇　杉帯又ハ杖
ツレ	男	直面　着附無地熨斗目　浅黄縷水衣　白大口　紋附腰帯　襟赤　男扇
後シテ	事代主命	面邯鄲男（紐黒）　黒垂　透冠　色鉢巻　着附厚板　白大口　袷狩衣（地色紫）　紋付腰帯　襟浅黄紺ノ類　神扇
ワキ	賀茂ノ神職	大臣烏帽子（赤上頭掛）　着附厚板　紺袷狩衣　白大口　腰帯　扇
ワキツレ	従者二人	大臣烏帽子（萌黄上頭掛）　着附厚板　赤袷狩衣　白大口　緞子腰帯　扇

季	四月	曲柄	脇能（初番目）（神祇物）
所	大和国南葛城郡御所町 葛城賀茂神社	稽古順	

代主

世阿彌元清作

ワキ神主　ワキツレ二人従者　真ノ次第上　ツヨク　拍子二合

朗カニサラリト

關の戸さゝで秋津州や。關の戸さゝで秋津州や。道ある御代ぞめでたき

ワキ詞　サラリ

「そもそもこれは都賀茂の明神に仕へ申す神職の者なり。又和州葛城の明神は。當社御一體の御事なれども。いまだ參詣申さず候程に

只今和州葛城の明神に参詣仕
り候四方の国治まる雲の果まで
も治まる雲の果までも君の御影は
明らけき天つ日影も山の端にかかる
時世は曇りなき峯もそなたか
葛城の賀茂の宮居に着きにけり
賀茂の宮居に着きにけり

シテツレ 真ノ一声
葛城の賀茂の神垣時を得て咲
く卯の花の白和幣鳴らさぬ枝
も夏木立繁り収めて風もなし

シテサシ
これは当国葛城賀茂の社中と
清め申す者なり有難や頃は卯月
の始めとて賀茂の御生の時までに
夏も来にけり小忌衣の袖白妙の

木綿畳幣とりどりの神祭。御
代を護りの道広くて。萬歳の末を祈
るなりいざいざ庭を清めんいざい
ざ庭を清めん。国よりも。塵に交
はる神慮。塵に交はる神慮和光
の影はいやましに栄え行くなり
国々も豊に照す日の本や。千里

萬里も治まれる。近江の海は。ありがた
や近江の海はありがたや。いかにこれ
なる老人。これなる社をはじめて参詣
の者なり。このあたりの皆故ある名所
あるべし。眺めの名所を教へ給へ　さん候
この葛城の賀茂の宮居。都の賀
茂と御一體の御事なれば。故の人

てこそ知ろし召さるべけれ。その上龍田
初瀬の紅葉をこそ知らねども歌人の
知ろしめすなればわれらが申すに及ば
ず。ただ君萬歳の御護りて當社に祝
り申すならでは他事も候はず。
あらめでたの御神拝やな。げにげに
に翁の申す如く。われら本社賀茂の

社頭にありながら當社の事をと尋ぬる
は今又あるべき事ならずや。畏れ
ながらこの御尋ねこそ少し不審に候へ
そよ賀茂の本社とや申さん事忝く
も開闢この方の影向の始めまづ當
城の賀茂あればこの宮居こそ取り
分きて賀茂の本社とも申すべけれ

ワキカヽル上 げにげにこれは理なり。まづまづ最初の影向は。この葛城の賀茂の神

シテ その後天下平安城に現れ給ふ賀茂の神山

ワキ その神の名を糺の竹の

シテ 御代も治まり七つの道も

ワキ 世を末すぐに

シテ 曇なき

○小謡

餘所までも名は葛城の賀茂の神。名は葛城の賀茂の神。御代を護りの御威光普しや善しや四海の波も治まりて国富み民も豊なる。御影ぞ貴かりける御影ぞ貴かりける。

クリ それ君は舟臣は水。水よく船を浮べ。臣よく君を仰ぐとかや。

○サシ曲独吟

○切迄囃子

然れば王城の鎮守として。眞にもつて御名高きぞその

水上の山陰の。賀茂の御手洗いさぎよき。流の末の久方のあめつちくれを動かさで安く楽む時とかや　有難しとも。なかなかに謡ともつても。述べがたし　然るに葛城や。高間の山と申すは。金剛の峯として胎金両部のその一法を現し。形も影向ある

とかや。西天佛在世より。東北の霊峯これ。大和の金剛山三国不二の峯として。御代の寶の山ともこれを名づけたり。そも葛城の。賀茂の神垣隔てなく王城の鎮守と現れ百王守護の神山や。賀茂の祭とて忝くも大君の清涼殿や長階の。

出御も絶えぬ年ゞて。卯月のその
日のとり〴〵の御遊なるとかや
シテ上 千早ぶる賀茂の御生や夏引の祭
毛の花車廻る日のかげに葵の二葉
より秋かざしめ結ひし姫小松の子代
をかけて水鳥のかもの羽色やし
もとハ葛城も同じ神山の一體

分身の御代を護り給ふなりその
御代を護り給ふなり。ロンギ上 げて葛城
の神の代のげに葛城の神の代の。
その道までゝ仰の雲の翁さても
誰やらん シテ上 誰ともいさや翁さび人
あらためそ知れてこその事代主の翁
とて御代を護りやすあり 地上 とてもや

事代主と聞くその名はいかで

シテ〽音高し

〽事代主とも申すてそ葛城の

神の名あれぞや。神體を現し。猿

宿とあがめまさんとて。葛城や高

間山の嶺の雲にかけりて天の

戸に入らせ給ひけり天の戸に。

入らせたまひけり

中入間

ワキ待謡〽心もともに澄む月の心もともに澄

む月の光さやけき夜神楽の声

声も同じ松の風更け行く空ぞ。

静かなる更け行く空ぞ静かなる

後シテ出端〽あら有難の折からやおそれ劫初

よりこの山に住んで王城を護り

御代を崇め。天下泰平の寶の山。

葛城の神と現れて只今こゝに来り

たりあら面白の遊やな　標繚ふ

葛城山に降る雪の　間なく時なく

おもほゆるかな　それはみ冬の深雪

の空　これは卯月の卯のはなの

雪を廻らす舞の袖古き大和舞拍子

を揃へておもしろや

神舞　キ上　キ切

ロンギ
○独吟　拍子合

あら有難やありがたや天下泰平楽

といかなる舞の事やらん　怨敵の

難を遁れて上下萬民舞ひ遊ぶ

さて萬秋楽と申すは　兜率天の

楽まで見佛菩薩舞ひ給ふ

春立つ空の舞には　春鶯囀を

舞ふべし　秋来る空の舞には　秋風

○仕舞

○小謡

樂と舞ふとかや舞に調ぶる聲の
樂〻と響くなり。いつもその聲つき
せぬはての御なるべしやな。萬歳の
四方の國道ある御代ぞめでたき
道ある御代ぞめでたき。

九世戸　概説

當今に仕へ奉る臣下、九世の戸の神に詣でんとて丹後の國に至りしに一人の漁翁に逢ふ、里人なればとて九世の戸の謂れを問えば、漁翁は懇ろに天神七代地神二代の神此處にて天竺五台山の文殊を勧請せる所なるにより九世の戸の名ある謂れを語り今宵は此處の御神事にて天より天燈海より龍燈現はれて此の神に捧ぐる時なりといふに官人は有難き思ひをなし、夜に入るを待てるに、やがて更け行く天の原、紫雲棚引き異香薫じ天女天降り、龍宮よりも龍燈を捧げ来り、天女龍神現はれて泰平の御代を祝しけりとなり。

此曲凡テ閑カニサラリト謡フベシ

役	別	装束附
前シテ	漁翁	面笑尉又朝倉尉ニモ(紐襷) 着附無地熨斗目 茶水衣 縷子腰帯 襟浅黄 尉扇 釣竿
ツレ	男(漁夫)	直面 着附無地熨斗目 浅黄縷水衣 白大口 紋附腰帯 襟赤 扇
後シテ	龍神	面黒髭(紐紺) 赤頭 竜戴 赤地金緞鉢巻 着附厚板 法被(萌黄)紺ノ鎧 赤地半切 紋附腰帯 襟紺 打杖指 燈明
後ツレ	天女	面連面(紐黒) 鬘 鬘帯 黒垂 天冠 着附摺箔 緋大口 紫長絹 腰帯 襟赤 扇指 燈明
ワキ	大臣	大臣烏帽子(赤上頭掛) 着附厚板 白大口 紺袷狩衣 紋附腰帯 扇
ワキツレ	従者二人	大臣烏帽子(萌黄上頭掛) 着附厚板 白大口 赤袷狩衣 紋附腰帯 扇

季	六月	曲柄	脇能(初番目)(神祇物)
所	丹後國與謝郡吉津村 久世戸文殊智恩寺	稽古順	

九世戸

作者不明

ワキ大臣 ワキツレ二人従者 真次第上ゲ ツヨク 拍子ニ合

風も涼しき旅衣。風も涼しき旅衣。朝立つ道ぞ遙けき。

ワキ そもそもこれは当今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の國九世の戸は神代の古跡にて。しかも天竺五台山の文殊を勧請の地なり。殊に林鐘なかば

彼の会式にて御座候程に。只今参
詣仕り候。

道行 三人
丹波路の。遥々と思ひ
立つ。遥々と思ひ立つ。旅の衣の
日も幾日生野の道の程遠き。まだ
踏みも見ぬ橋立や。九世の戸に
着きにけり。九世の戸に着きにけり

ワキ サラリ
日を重ねて急ぎ候程に。これははや九
世の戸に着きて候。承り及びては
よりも天の橋立まことに妙なる眺め
にて候。尚々心静かに眺めばやと存じ候

シテ漁翁 ツレ漁夫 真ノ一声 拍子ニ合ハズ
浦風も。涼しさ添へて追風や。波
路遥かに出づるなり

ツレ
与謝の海松藻
もいさみある。眺め妙なる気色かな

シテ サシ 上
所から曇らぬ空も与謝の海の。天

の。梯立遠々し。影踏む道に行きかふ
人もげに祭の時とて夏水無
月のなかば行く。母の渡りの。ひまも
なき。貴賤群集ぞ。有難き。世渡
る業の惜しめども。いざや歩みを運ばん

○小謡

上歌 ○神の代の昔語りと思ひ出の。昔語りと
思ひ出の。月白曇らぬ天つ神。地神

二代を数へ来てこゝ九世の戸の名
も高き。大聖文殊と勧請の。御影
あらたに捧ぐる。法の燈火曇らぬ。
照す誓ひの頼もしや。照す誓ひの頼も
しや。いかにこれなる老人に尋ぬべき
事の候。汝方の事にては候か何事を
御尋ね候ぞ。これは都より始めて来

謂のあるなり。まづこの所をも九世の戸と。なづけそめにしそのいはれをも委しく語り給ふべし　シテ「われらは賤しき漁人なれば。いかで語り申すべき。さりながらまづ九世の戸と名づけし事。恐くも天神七代地神二代の御神この国に天降りましまして天竺五台山の文殊を勧請し給へば天の七代地の二代をこれ九世の戸と名づけしなり　ツレカヽル上「されば菩薩の像體もこれ帝釋の御作とかや　シテ「その後龍宮に入り給ひ法を弘めて程もなくこの島にあがり給ふ　ツレカヽル「すなはち獅子の座りとて今に絶えせぬ跡とめて　シテ「龍神は燈を捧ぐれば

ツレカカル　天より天人天降り。天の燈火龍神の焚く燈の松が枝に光をならべ渇仰の時節今宵なり。有難かりける。時節なり。

ワキ上　さては神代の昔より。今に絶えせぬ其の松に捧ぐる御燈をまのあたり拝まん事ぞ有難き

シテ　なかなかの事御覧ぜよ出づる月

○小謡

も曇なき。上音　天の橋立光そふ。天の橋立光そふ都の人も浦人も語れば思ふ事なくて四方の眺めも面白や。松風も音しげく立ちくる浪も白妙の月澄み昇る気色かな月澄み昇る気色かな。

クリ上　それ地神二代の御神始めてこゝに天降り。末世の衆生

シテサシ上
済度のためにて霊像を勧請し給へり
されば此地開闢の昔なれや神国と
あらかねのきざすの祭しかじかなり
衆生済度の方便生死の相をたす
けんとて三世覚母の大聖文殊と
この為に安置し給ひけりこの橋立と
造らんし給ありしその頃は神の代
いまだ遠からず雲霧虚空に充ち
満ちて常闇のごとくなりしが、おのおの
の神火をともして日夜に土を運
びて同じく松を植ゑ給ふその燈火
のあまりを彼処に置かせ給ひしよ
り日置の浦とてこれも故ある神所
なりかくて神々集りて天竺五臺

山の文殊と勧請し給へば上は有頂の
雲を分け。下は下界の龍神音楽種
々の花降り。供ごの燈を捧げ奉る。その影
向のありさま語るも。愚なりけり

ロンギ上 げに有難き神の代の。げに有難き
神の代の。昔語りも今の世に。残る燈
火曇りなき。御影をも松の木陰かな

シテ上 短夜の空も更け行く浦風の音を
静めて待ち給へ。必ず燈現れん

地上 不思議やさてもかくばかり優しく語
る浦人の。その名をなのり給へや

シテ上 今は何をか包むべき。われは知らずや
この寺の 大聖文殊の御前なる。さい

古八 大聖老人
やう老人はわれなり。御身信心清

浄の心と感じまゐりたりと。云ひ捨
てゝその姿。松の木陰に失せにけり
松の木陰に失せにけり　中入来序間

天女上　出端　拍子ニ合ハズ
久方の。雲居に渡る橋立の。天つ御空
の御階かな　月も更け行く天の原
月も更け行く天の原。紫雲靆き異
香薫じ。天つ少女の雲の羽袖も

妙なる灯を捧げ松の梢に天降
り天降るかゝりければ。龍宮より捧
ぐる灯の光。海上に浮んで見えたる
粧ひ。あらたなりける奇瑞かな

後シテ龍神上　早笛
本光あまねき灯の。龍宮の内裏
と照すなり　地　空には日月灯明仏
には日月灯明仏　又下界には龍神

の燈火。潮に揺られ浮き沈めども。光はいよいよかがやきあがりて天地の両燈一つになり合ひ。九世の戸のあけ方。明々たり　同　固より龍神飛行自在に　同　固より龍神飛行自在に通力遍満の奇特を見せんと。千地に波瀾を起しつ。海山虚空に飛びかけりて。嵐を蹴立て。雨を起して吹き曇り吹き曇り震動すれども燈の光は。明らかなる度澄み昇るや。天つ少女の姿も雲居に入らせ給へば又龍神波を蹴立て逆巻潮の廻るし共に。逆巻く潮の廻ると共に。ひかれて波にぞ入りにける。

○仕舞

逆矛　概說

外一巻ノ五

當今に仕へ奉る臣下大和龍田の明神に詣でけるに老翁に逢ふ、寶山は何處ぞと問へば我こそ瀧祭の神に詣ずるもの道しるべせんとて伴ひ行くに、四邊の風物神寂びて森々たり、臣下深く感を催ふして此宮に納められし天の逆矛の謂れを問へば老翁即ち、昔國常立の尊より伊弉諾伊弉冊の尊に豐葦原を治めよとて渡し給ひける矛の謂を物語り、此矛こそ大日本を守りの矛此神こそその矛を預り納むるもの、今は何とか包むべき我瀧祭の神なりとて失せにけり、夜半神體再び現はれ樂を奏し舞を舞ひ矛の威德を說き日本國の泰平を壽ぎて歸りけりとなり。

此曲前後共凡テサラリト重クナラヌ様謡フベシ
小書　替装束（白頭又ハ黒頭ニテ勤ムルヿアリ黒頭ノ節ハ重シサレド習ニ非ズ替ニスルナリ）

役別		装束附
前シテ	尉	面小牛尉（紐黒）　尉髪　着附小格子　茶水衣　白大口　緞子腰帯　襟樺浅黄　尉扇
ツレ	男	直面　着附無地熨斗目　浅黄縷水衣　白大口　腰帯　襟赤　扇　松明
後シテ	滝祭ノ神	面小癋見（紐赤）　赤頭　唐冠　赤地金襴鉢巻　着附厚板　紫袷狩衣　半切（地色萌黄紺ノ類）　縫紋腰帯　襟紺縹色ノ類　神扇　矛
後ツレ	天女	面連面（紐黒）　鬘　鬘帯　黒垂　天冠　着附摺箔　紫長絹　緋大口　腰帯　襟赤　葛扇
ワキ	大臣	大臣烏帽子（赤上頭巾）　着附厚板　紺袷狩衣　白大口　腰帯　扇
ワキツレ二人	従者	大臣烏帽子（萌黄上頭巾）　着附厚板　赤袷狩衣　白大口　腰帯　扇

季	九月	曲柄	脇能（初番目）（神祇物）
所	大和国生駒郡三郷村立野竜田神社	稽古順	

逆矛（サカホコ）

宮増某ノ作

ワキ大臣 ワキツレ二人従者 真ノ次第 上ツヨク 拍子ニ合

大和にも、織る唐錦、大和にも織る唐錦、龍田の神に参らん。

ワキ詞サラリ　そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州龍田の明神は霊神にて御座候程に、その度君に御暇を申し、只今龍田に参詣仕り候。

道行二人上　國々の。

まは七つの数路を。まは七つの数路を。夜深く出でて淀舟や。立つ旅衣遥々と。なほ雲遠き山城の。井手の下紐結ひかけし。跡も昔に奈良坂や。龍田の山につきにけり。龍田の山につきにけり

シテ尉ツレ男二人上 真ノ一声 拍子ニ合ハズ

龍田川。錦織り掛く神無月。色づく秋の梢かな

ツレ 紅葉の色も時めきて錦を張れる。気色かな

シテサシ上 これは当社龍田の里に住みて久しき者なるが。農職ながら昔より神前に仕へなり。名におふ龍田の神垣や。宮路を通ひつつ頼む願ひも浅からず。恵もと千代と祈るなり 頌は長月二十日あまり。紅葉もいたつらにたゞ言

○小謡

の夜の錦なり。神南備の御室の
岸や崩るらん。御室の岸や崩るら
ん。龍田の川の水の色の濁るとも
隔てじな塵に交はる神慮すぐに
御影ももみぢ葉の。ちは常盤の
色はえて掻ひも絶えぬ祭いたゞ
く神の手向かないたゞく神の手

向かな。ワキ いかにこれなる火の光に
ついて尋ね申すべき事の候
シテ そなたの事にて候か何事にて候ぞ
ワキ これはこの處始めて一見の者なり。
寶山への道しるべして給はり候へ
シテ 易き宮の御事これこそ夜祭に
参る者にて候へ御道しるべ申し候べし。

此方へ御出で候へ　ワキ　あら嬉しや やがて
参らうずるにて候　シテ　ありがたうされて
そ寶山にて候へ　ワキ　承り及びたるより
神さび殊勝にてこそ候へ。又日本第一
の寶の御鉾を納め置く。この御山
の事にて候か　シテ　なかなかの事其處の
御事にて候　ワキ　さらばこの山の謂を御

物語り候へ　シテ　委しく語つて聞かせ申
し候べし　クリ地上　そもそも瀧祭の御神
と申すは。即ち當社の御事なり。昔天祖
の詔のり。未明かなる御國とかや
シテサシ上　○サシ曲独吟　ここに第七代に當つて現れ給ふを。
伊弉諾伊弉冊と號す。時に國常
立伊弉諾に詔して宣はく。豊葦原

千五百種の國あり。汝よく知るべし
とて。則ち天の瓊矛を。授け給ふ
クセ
伊弉諾伊弉冊は。天祖の御教へすぐ
なる道をあらためんと。天の浮橋
に。二神たゝずみ給ひて。御矛を
海中にさしおろし給ひしより。御
矛をあらためて天の逆矛と名づけそ

め。國富み民を治め得て。二神の始め
より今の代までの寶なり。その後
國治まりて。御代平かになりしかば。
瀧祭の明神この御矛を預かりて。
所も善しやこの御山に納めて寶
の山と號すなり　そもそも御矛
の主たりし名もいさぎよき瀧祭

の神の社は、いづくぞと。問へば名をも得
し龍田山。紅葉の八葉も則ち矛の
刃先より。照らす日影や紅の光さし
おろす矛の露。天地すなほなる事
もこそ寶身は知らず。国の寶
の山高み。よくよく禮し給へや。

ロンギ上

げにや龍田の神の名の。げにや龍田
の神の名の。寶の矛同じく。所
をよきて見せ給へ、

シテ上

むつかしの猿
人や。影恥かしき龍田山の。もみぢ
衣の千早ふる神の御子早めんと

円上

颯々の鈴の聲。ていとうとうつ浪の。
鼓も同じ瀧祭の。神はわれなりと。
木綿四手を靡かし榊葉をとうたひ

夜に入りて月の夜声もすみわかに
入るとみえて失せにけりかけ入る
と見えて失せにけり　中入間

（ワキ上哥　三人待謡）
御山の作の紅葉かたしきて作の
紅葉かたしきてここに仮寝の枕より
音楽聞え花降りて異香薫ずる
不思議さよ異香薫ずる不思議さよ

（地上）（出端　天女出　拍子ニ合ハズ）
楽にひかれて古鳥蘇の舞の
袖てそゆるぐなれ　（天女舞）

（後シテ滝祭神上）
そもそもこれは天の御子を守護し
なる滝祭の神和光に出て龍田
の神或は天つ御空の御子　（シテ）又は
宝山倶利迦羅御嶽戴きまつれや
祭るかしなれや滝まつり　拍手

響く山の雲霧晴れ行く日の光の
めぐにて天の御矛は。現れたり シテ そも
そも大日本國といつぱ神國たり。我
は本覺眞如の都を出でゝ。和光同塵
の御形ちもつとも佛法流布の國た
るべしやなうありがたや 地上 南無や歸命頂
禮大日覺王如来 シテ 昔伊弉諾伊弉

冊の尊この御矛を携へて。天の浮橋
を。踏み渡り給ひ則ち御矛を
さしおろし。則ち御矛をさしおろ
し給ひ。青海原をかき分けかき分
け探り給へば。矛の末たりし露凝り固
まつて。國となれり シテ 先づ淡路嶋。
紀の國伊勢志摩。筑紫四國。總じて

〇仕舞

八つの国となつて大八洲の国と名づけ。天地人の三才となる事も。その身の徳ありあら有難や。さて国々は荒磯なれば。さて国々は荒磯なれば。さながら険しき葦原なりしを。身の手風疾風となつて。葦原を薙ぎ払ひ引き捨て置けば。山となりぬ。足引の山といひ。土はさながら石がねなりしを。身の刃先にあたり砕けば平かなると。あらかねの土といひ。その外東西南北。十方を治め。悪魔を退け豊葦原の。国治まりて。御身を守りの倶利迦羅明王。この寶山に。納めまり毎日めぐるや日

の本の寶の山に龍田の神は寶の山に。龍田の神の御身を守りの神體なり。

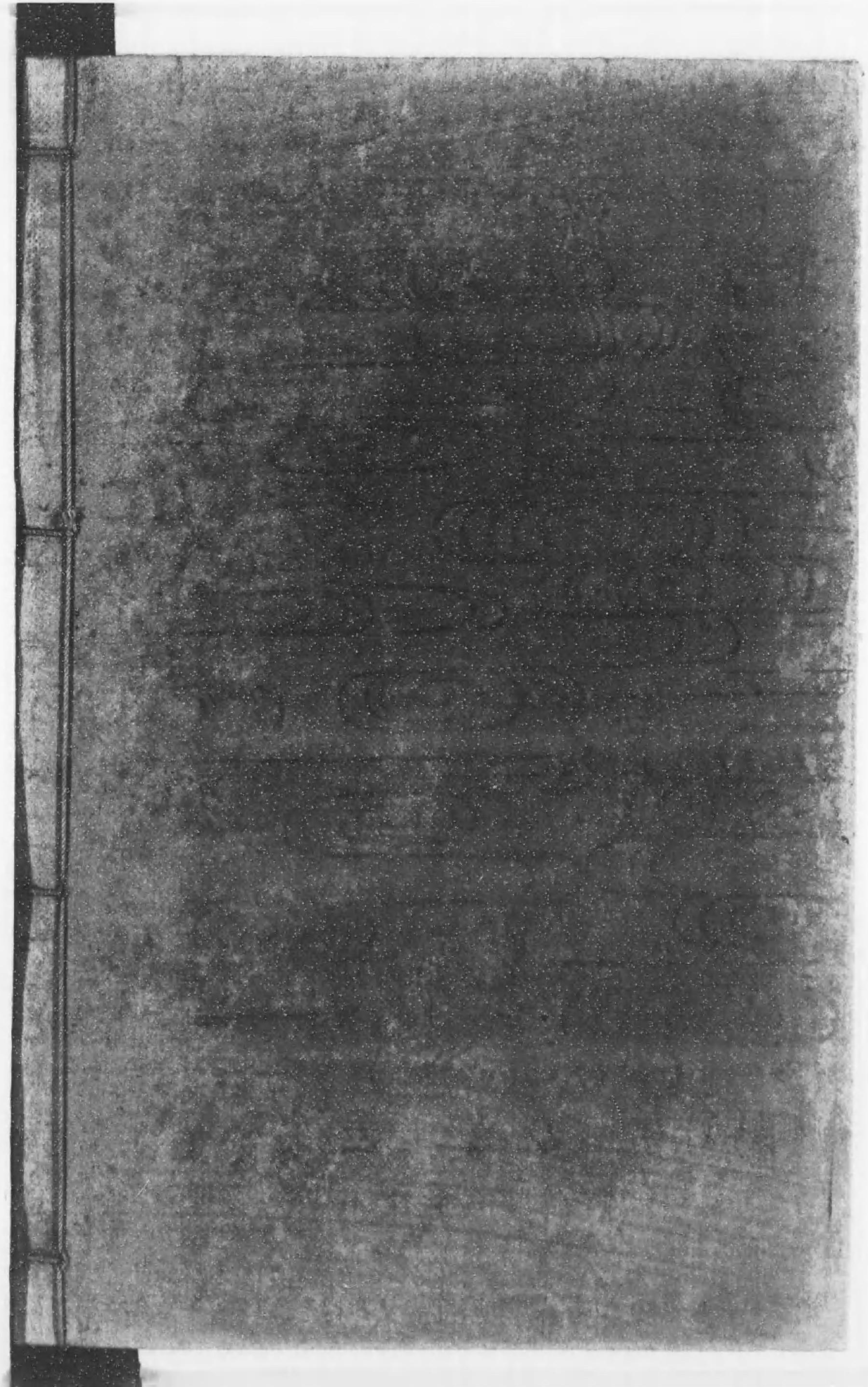
大正九年一月貳拾日印刷
同　年一月廿五日發行

所有權
複製不許

訂正著作者　廿四世　觀世元滋
京都市上京區二條通麩屋町東北角

發行兼印刷者　檜常之助
東京市神田區錦町二丁目拾番地

發行所　檜大瓜

印刷所　江川堂
東京市四谷區傳馬町貳丁目

終